路下生活者聞き取り書き起こし（一部意訳）

今から100年くらい前の話です。
都市の河川が次から次に蓋をかけられて地下に潜っていったとき、同時に地下に居場所を移そうとしたのが路上生活者です。我々の先輩に当たる人たちだと思います。
東京の路上で暮らしていた人たちの一部は、一年中気温が変わらなくて、雨風も凌げる暗渠で暮らすようになりました。「路上生活者」「浮浪者」「ホームレス」とかの名前を捨てて、「穴暗人-アングラマン-」と名乗り始めたのはこの時です。生きる場所を追われたやつらがみんなでユートピアを作ろうとしたんです。
でも問題がありました。
路上で暮らしていたやつらのほとんどが男だったんです。だから地下集落を拡大させることができませんでした。若い路上生活者が時折暗渠に迷い込んで、新たな住人となることはあったそうですが、それ以外の方法で人が増えることはありませんでした。
転機が訪れたのは東京に大雨が降った翌日でした。増水した暗渠に、ゆりかごに揺られた赤ちゃんが流れてきたんです。男たちは迷いました。男たちは自分たちが悪人だとは思えなかったんです。でも結局、男たちはその女の赤ちゃんを自分たちの子として育てることにしました。
「恵-めぐみ-」と名付けられたその女の子は深い愛情を受けて育ちました。うらやましいくらいだったと言います。子供を持つことの叶わないやつらにとっては宝物だし、女の存在は集落にとって何よりも重要でした。少女にただ足りないのは、日の光だけだったともいえます。
穴暗人にとって、恵の存在を地上世界に知られることは何よりも避けるべきことでしたから、恵が地上世界に興味を持たないように、穴暗人たちは様々な工夫をしました。
恵には物語が話されました。地上には悪魔のように恐ろしい魔物がいるという物語です。女がそこへ出ていけばたちどころに犯され、食われる世界です。それが地上世界であると話しました。安っぽいけれど、そんなものでもよかったんです。小さな頃から繰り返し聞かされれば、それは真実の物語になります。

恵はその後、若い穴暗人の男と結ばれて身篭りました。これが「地下人-チカンチュ-」の起源です。地下で生まれ、地下で育ったこの子供は、特異な成長を見せました。その要因は産業排水や生活排水に含まれる過剰な養分であるとか、投棄物に含まれる放射線によるホルミシス効果であるとか、日光がないという特殊な生育環境であるとか色々という人がいましたが、何が正解かは誰にもわかりません。いつかこの存在が当たり前に知られるようになったら誰かが研究するでしょう。そして、過去のあらゆる文明と同じように、渋谷川だけじゃなく、神田川、荒川、目黒川、多摩川など各河川の地下流域で同じ事象が同時多発的に起こっていたと言います。こうして、東京地下世界はあなたたち地上人の足下で静かに成長し

ていったのです。

穴暗人と地下人は共生しました。
綻びが生じ始めたのは、地下世界が興ってから半世紀が過ぎた頃だったと言います。
穴暗人と地下人たちの住む場所が分かれ、それぞれに自治が確立し始めた時、地下人の中で不満の声が上がり始めました。
最初の不満は「穴暗人たちが塩の値段を不当につり上げている」というものでした。
地上世界と通行できる穴暗人と、地下世界に適応した地下人はそれぞれに物や役務を交換して暮らしていました。
地下人は暗渠に暮らす魚類や虫を捕って穴暗人に提供した一方、最も欲したのは塩でした。雨水や暗渠を流れる下水から塩は作れないのです。穴暗人は地上で手に入れた塩を、地下人が捕った地下動物と交換していました。しかし、この相場が変動したのです。
穴暗人は塩の価格をじりじりと上げていきました。
地下人にとって塩は生命線であった上、穴暗人を通してしか手に入れることができません。一方、穴暗人たちは地下人たちが捕る地下動物に頼らなくとも、地上で廃棄される食物で生きていくことができたのです。
バランスは崩れていました。
人間は弱いんです。穴暗人は人間です。
楽な暮らしの誘惑から逃れることはできません。塩の相場をじりじりと引き上げました。当然、地下人たちの暮らしは苦しくなっていきます。
そんな時に、取り返しのつかない事件が起こってしまいました。

またしても大雨が降った翌日のことです。
地下人のある家族の母親が行方をくらませました。地下人は一族を上げて捜索しましたが、母親は見つかりませんでした。一人の軽薄な地下人がいました。彼は誤って塩を保存していたカラーコーンを倒して途方に暮れていました。取引の時間は朝だけと決まっていたのですが、焦ったその男は夜中に穴暗人の集落を訪ねたのです。そしてそこで見てしまいました。行方知れずになっている地下人の母親が、薄暗い部屋のテーブルに横たえられて、穴暗人たちに囲まれている光景をです。そして、その母親は死んでいたのです。
取り乱した男は、急いで地下人の集落へと戻りその光景について話しました。
地下人の集落は怒りに沸きました。興奮した地下人たちは手に棍棒を取って、穴暗人の集落を襲ったのです。しかし穴暗人たちにとって、集光に振り切って虹彩を失った眼球を持つ地下人たちを否すのは赤子の手をひねるようなものです。懐中電灯を向けるだけで、地下人たちは立ち所に動けなくなってしまうのですから。
地下人に多くの犠牲者を出したこの事件を境に、二つの種族は敵対しました。
そうして宮益橋を境界に、両者が離れて暮らすようになったのが今の形です。――